
消失した記録～ロストメモリー～

風鏑龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消失した記録〜ロストメモリー〜

【Nコード】

N2189Y

【作者名】

風鏑龍

【あらすじ】

荒廃した世界・・・魔王を名乗る者が現れ・・・魔物を統べている・・・

過去に一度、魔王と討伐せんと立ち上がる者達が居たが・・・

その者達は大きな戦いの最中に消えて・・・長い時が過ぎた・・・

少年は記憶を失い、河原で倒れているのとあるギルドに保護される・・・

そこで出会った少女・・・同じように記憶を無くして・・・

そして、お互いに懐かしさを感じ合う・・・不思議な出会い・・・少年と少女は記憶を探す為に行動を共にする事にした・・・助けてくれたギルドへ、せめてもの償いとして銃使いとして加入した。

運命は遠い過去に紡がれていた。

しかし途中でその運命は停止していた・・・

少年と少女は出会い・・・停止していた運命がまた動き出す・・・人間は破壊と創造を繰り返し・・・何度も同じ過ちを犯し続ける・・・

少年と少女は・・・どんな運命を紡ぐだろうか・・・

人間と同じ・・・破壊の運命を紡ぎ、滅亡を迎えるのだろうか？

それとも・・・

ハンゲームのサークル「自作小説投稿所」と言う所にも投稿しています。

第一話 目覚め（前書き）

荒廃した世界・・・魔王を名乗る者が現れ・・・魔物を統べている・・・

過去に一度、魔王と討伐せんと立ち上がる者達が居たが・・・
その者達は大きな戦いの最中に消えて・・・長い時が過ぎた・・・

少年は記憶を失い、河原で倒れているのとあるギルドに保護される・・・

そこで出会った少女・・・同じように記憶を無くしていて・・・
そして、お互いに懐かしさを感じ合う・・・不思議な出会い・・・
少年と少女は記憶を探す為に行動を共にする事にした・・・
助けてくれたギルドへ、せめてもの償いとして銃使いとして加入した。

運命は遠い過去に紡がれていた。

しかし途中でその運命は停止していた・・・

少年と少女は出会い・・・停止していた運命がまた動き出す・・・
人間は破壊と創造を繰り返し・・・何度も同じ過ちを犯し続ける・・・

少年と少女は・・・どんな運命を紡ぐだろうか・・・
人間と同じ・・・破壊の運命を紡ぎ、滅亡を迎えるのだろうか？

それとも・・・

第一話 目覚め

うつすらと感覚が戻り、体中に違和感を感じる・・・

動けない・・・体が動かない・・・ここは何処だろうか？

体はまるで鉛の様に重く、拘束されているのでは？と思う程である・・・

川の流れる音がする・・・川原だろうか？

そこまで思い至った・・・しかし、そこで意識は急激に暗闇に沈んで行く・・・

ここは人が行き着いた先・・・遠い遠い未来の物語。

人々が行き着いたのは天国でも桃源郷でも無く。

何もない・・・荒廃した世界・・・

人々は魔力を科学的に生み出し、その魔力から魔法を生み出した・・・

より肉体的に優れた種を・・・人々はDNAを弄り・・・獣人を生み出した・・・

機械こそ至極・・・機械に知能を与え・・・それが裏目に出て・・・
キリングマシン
殺戮機械が完成した・・・

魔法によって突然変異を起こしたウィルスによって魔物が生まれ。そして魔王が現れ・・・世界は腐敗し破滅を迎える。

貴方なら・・・そんな世界で何を求めますか？

うつすらと目を開ける・・・意識がゆっくりと起動を始める・・・ここは何処だろう？

??? 「大丈夫？」

声をかけられ・・・初めて人が居るのに気がつく・・・

声を発した者は白衣を来た女性である・・・ここで意識が完全に起動した・・・

白衣の女性 「大丈夫？」

もう一度聞かれた・・・とりあえず答えようと思いい口を開くが・・・

??? 「大丈夫です・・・」

体中に違和感を感じるが、特に動かなかつたりはしないのでそう答える。

白衣の女性 「ん・・・まあ、特に怪我は無いみたいだし・・・大丈夫よね・・・これは何本？」

女性は何かの紙に色々書いてから、指を一本立てて目の前に立て質問してきた。

???

「一本・・・」

ここで二本と答えても何の特にもならなそうなので、特に捻くれもせず正直に答える。

白衣の女性 「正解・・・じゃ、これは何？」

女性は手に持ったボールペンをこちらに見せてきた。

???

「ボールペン」

これも正直に答える

白衣の女性 「じゃ、使ってみて」

女性はノック式のボールペンを差し出してきた・・・

カチャツカチャツとペン先を出し入れしてみる・・・

白衣の女性 「んゝ・・・大丈夫つと、名前は？」

ここに来て名前を聞くのか・・・普通は最初に聞くのではないのだからうか？

とりあえず自分の名前を答えることにした――

???

「名前は・・・なま・・・」

言葉に詰まる・・・思い出せない・・・

白衣の女性 「どうしたの？まさかわからないとか」

女性は笑いながら聞いてくる。

???

「・・・・・・・・・・」

こちらが何も答えないと女性は笑うのをやめ、真剣に「こちらを見る」
・

白衣の女性 「まさか・・・マジでわからない感じ？」

???

「・・・・・・・・はい」

返事をしながらも思考の海に潜り込んでいく・・・

自分は誰だ？

第二話 出会い

自分の名前を思い出せず・・・殆どの事は思い出すことも出来ない・・・記憶喪失・・・

だけれども、一部思い出せる部分があった・・・断片的だが・・・高い所から落ちている時の映像・・・

何故落ちていたのかはわからない。

ただ、思い出せたのは、高い所から落ちている時の浮遊感と・・・水に叩きつけられた時の衝撃・・・

それと、落ちている時にもう一人居た・・・茶髪の活発そうな印象の——少女。

その少女の名も思い出せない・・・しかし・・・なぜかその少女はとても親しい人物だと感じた・・・

何故だかはわからない・・・唯、その少女は自分が水面に叩きつけられる随分前に喪失していた・・・

記憶が断片的なので状況がまったくわからなかったが・・・

これは憶測であるが・・・

多分、自分はその少女と何かをしていた——何かをしようとしてい

たのだろう。

しかし、その途中で高い所から落ち・・・落とされた？・・・そして、

その少女は落下の途中で何かの魔法を使って助かり、

自分は魔法を使う余裕も無く水面に叩きつけられたのだろう・・・

そして、そこは自分が倒れていた河原の上流だったのであろう。

そこから流され、偶然にもあの河原にたどり着いた・・・そう考えるのが普通ではないだろうか？

河原に倒れていた自分を助けてくれたのは「魔術結社^{マジックキャバル}」と言うギルドの隊員であった。

その隊員達はその地域の魔物を討伐する為に組まれたチームであり、

河原に倒れている所を発見した時に、既に力尽きていると思ったらしい。

しかし、実際には息があったらしく、咄嗟にここにつれて来たそう
だ。

ここに来てから2日程は寝続けていたらしい・・・

ここは地下に作られた地下都市である。

出入りは基本的に転移装置か魔法か数箇所存在する出入り口で行う。

目を覚ました場所は地下都市のギルド本部の医療室・・・まあ、いわゆる病院である。

最初に出会った白衣の女性はミラーズと名乗った。

その女性は少年に対して呼び名が必用だと判断し、一時的にだが

「名無し」と言う名で呼ばれる事になった。

ミラーズ 「記憶喪失・・・強い衝撃や精神的ショックを起こした時に起きる病気の一種ね・・・

ただ・・・水面に叩きつけられた時の衝撃は相当な物だと思うのだけれど・・・

体に目立った打撲が無いのは何故かしら？」

名無しの腕や足や背をぺたぺたと触って外傷を確認するが、特に外傷らしい外傷も無い・・・

今はベッドに腰掛、ミラーズを向かい合って座っている。

ミラーズ 「うん・・・所持品からして銃使いなんだろうけど・・・この銃って物凄い旧式なのよ ね・・・」

ベッドの横の台の上から銃を取り上げる・・・

シンプルな作りのリボルバーである。

不思議な事に普通のリボルバーなら「弾倉振出式」スイングアウトか「中折れ式」トップフレイク、

もしくは「固定式」ソリッドフレームのどれかの方法でリロードするはずなのだが、

このリボルバーは 回転弾装部分が完全に固定されていて、リロードが出来ない。

理由は魔銃・・・簡単に言えば魔法と銃をあわせた物であるからである。

回転弾装内に魔法を使って弾丸を精製し、それを撃ち出すタイプの銃である。

ミラーズ 「それにこの銃・・・壊れて・・・とまではいかないけど、

相当酷使したのか弾装部分がボロボロね・・・使えない事も無いけど・・・

これ、貴方の物のはずよ？」

行き成りミラーズに銃を投げられたので、心の中では慌ててそれをとろうとするが・・・

・・・その銃はすんなりと名無しの手に収まった・・・

名無し 「あれ？」

その銃を持った時一瞬何かがフラッシュバックした・・・

しかし、そのフラッシュバックが何かは良くわからなかった・・・
一瞬見えた光景は・・・真っ赤な視界の中・・・燃え盛る炎の中に
背に膜の張った翼を広げた・・・

悪魔の様な・・・逆光で顔は見えなかったが、影のみでそんな感じ
に見えた・・・

ミラーズ 「大丈夫？銃を握り締めて・・・何か思い出した？」

考え込んでいる間にミラーズがこちらを覗き込んでいた・・・

名無し 「え・・・ええ、何か見えた気がしました・・・」

自分の手の中の銃を知らず知らずの内に弄んでいた・・・

ミラーズ 「それは名無しの物で正解か・・・使い込まれてる銃
ね、旧式だけど」

自分の手の中に納まっている銃はまるで自分の体の延長であるかの
ようだ・・・

くると手で弄んでいると誰かやってきた。

??? 「おう、目が覚めたか・・・で、どうだ？」

やって来たのは大剣を背中に担いだ青年と自身の身長よりも長い杖
を背に背負った少女であった・・・

名無し 「なっ!？」

現れた少女は、最後に記憶の中で見た少女にそっくりだった。

第三話 断片的

大規模都市・・・元々はそう呼ばれていた所も今ではこう呼ばれる
ロストシティ
「廃都市」と・・・

医療室にやってきた青年はクルシス、少女はスイレンと言っらしい・
・

クルシス 「状態は？起きてるって事は悪くは無いと思うが・
・」

ミラーズ 「えっと・・・まあ、アレねスイレンと同じような
感じ記憶が飛んでる」

先程メモを取っていた何かの紙を確認しつつ説明を始める。

ミラーズ 「まず身体的外傷は存在しない・・・まあ、無傷つ
て事ね

聞いた話だと高い所から川に落ちたみたいだけ
れども・・・
とりあえず、状況はスイレンと同じ感じね」

ミラーズはおでこに手を当てて空・・・まあ、天井だが・・・を見
上げてブツブツと何かを呟き始めた。

スイレン 「こんにちは・・・」

スイレンは見た感じ元気で活発そうなイメージだが、今は表情は暗

い・・・

自分と同じ記憶喪失・・・とりあえずおぼろげな記憶の中にスイセンが居た事を話すか・・・

名無し 「あの・・・」

口を開くと真っ先に反応したのはクルシスであつた。

クルシス 「どうした？何か思い出したか？」

期待の眼差しでこちらを見てくる・・・

名無し 「いえ・・・そういう訳では・・・」

期待に答えられそうに無いのでとりあえず謝罪しておく。

クルシス 「そうか・・・」

あからさまにがっかりしている・・・とりあえず、完全に期待外れという訳でもないと思う・・・

名無し 「とりあえず・・・えつと・・・スイレンさん・・・でしたっけ？・・・」

先程ほんの少し覚えている記憶で確かかどうか
わからないのですが・・・

崖・・・からかどうかは知りませんが、一緒に
落ちていた少女が居て・・・

その少女がスイセンさんに似てるんです・・・

瓜二つで・・・」

スイレ
ン 「・・・っ!!」

ガシッといきなり少女が両肩を掴んできた・・・

スイレ
ン 「私の事知ってるの!? 私は誰!？」

ガツクンガツクンと揺さ振られて、少しびっくりして途切れ途切れに言葉を紡ぐ・・・

名無し 「おぼろげ、なので、よく、わから・・・」

ミラーズ 「スイレ、落ち着きなさい」

少々強引にミラーズがスイレンを引き剥がす・・・

クルシス 「大丈夫か?・・・とりあえずその話を良く聞かせてくれ」

名無し 「えと・・・その少女と一緒に落っ下していで・・・」

でも、水面に叩きつけられた時にはその少女は居なくて・・・」

おぼろげな記憶を手繰り寄せて必死になり説明をするが、

どうしてもおぼろげで詳しくは説明できない・・・

名無し 「それで・・・」

ミラーズ 「もう良いわよ・・・とりあえずスイセンと名無しが記憶喪失前に知り合いだった

らしいってのがわかっただけで十分ね・・・
名無しとスイセンはこれから一緒に

行動しなさい、もしかしたら記憶が回復する
かもしれないからね」

スイレン 「はい・・・わかりました・・・」

名無し 「えと・・・はい・・・」

とりあえずスイセンと言う少女と行動を共にすると言ったことになった・・・

ミラーズ 「じゃ、名無しの案内はスイセンとクルシスに任せるわ」

ミラーズはそういうと部屋を出て行った・・・

クルシス 「んあー・・・ああ、ここの施設について説明・・・の前にここがどういうところか

わかるか？記憶喪失でそういう事まで忘れて
るってのは笑えないからね」

・ クルシスは名無しとスイレンの二人に話しかけてきているらしい・・・

スイレン 「すいません・・・わかりません・・・」

名無し 「俺も・・・わかりません・・・」

記憶の中を探るが・・・記憶の中に「マジックキャバル魔術結社」と「地下都市」と言う単語は出てこなかった・・・

クルシス 「あー・・・説明・・・まあ、ここで座って話すより、実際に設備を回りながら説明

した方が効率がいいな・・・よし、名無しは歩けるな？」

名無し 「はい」

クルシス 「じゃ、しっかり着いてこいよ」

名無しはスイレンと共に「マジックキャバル魔術結社」のギルドのある、

小型地下都市——「シャドウマジックシティ影潜魔法都市」と言うらしい——を案内してもらう事になった。

第四話 小型地下都市

小型地下都市 シャドウマジックシティ 「影潜魔法都市」・・・收容可能人数は5～6万人。

生活に必要な設備が整えられている地下都市である。

現在の人口は236人・・・名無しを含めると237人だそうだ。

マジックキャバル 「魔術結社」ギルドの合計人数は132人である、

内、付近の魔物を討伐したり、廃都市の調査をしている戦闘部隊が68人、

残りの64人は都市内部に存在する大型コンピューターから

まだ何とか生きている人工衛星を使って他の都市のギルドと連携をとる為に通信を担当したり、

ギルドの物資を振り分けたり等の雑用を引き受けている援護部隊である。

都市に居る人の内、36人が獣人である。

獣人の半数はギルドの戦闘部隊に所属している。

ギルドに属さないで街で暮している人々は市民と呼ばれている。

クルシスの説明を一つ一つまとめていく・・・

都市の内部——と言っても基本的な設備のみ——を回って、説明してくれていた。

そして、現在位置は都市内部のギルド本部にあるギルド員の憩いの場のカフェである。

そこで、クルシスは基本的な都市の状態の説明をしていた・・・

クルシス 「そういえば自己紹介してねえな・・・」

俺はクルシスだ、見ての通り戦闘部隊所属の大剣使いだ」

右手を差し出されたのでとりあえずこちらの右手を差し出して、握手を交わす。

名無し 「俺は・・・」

自分も自己紹介をしようとして口を開くが・・・何も思い出せないのでどんな

自己紹介したら良いのかわからずに口を瞑ってしまう・・・スイレンも少し困っているようだ・・・

クルシス 「ああ・・・すまん、記憶喪失なんだよな・・・わりい」

つい口が滑ってしまったらしい・・・

クルシス 「ところで、名無しはこれからどうするんだ？

今の雰囲気を変えようとクルシスが話題を変えてきたのでそれに乗ることにする。

名無し 「わかりません・・・」

新しい話題に食いついたのはいいが、なんて答えていいのかかわからない。

クルシス 「あーまあ、そうだよな、記憶喪失でこれからどうするかなんてさ

まあ、スイレんみたいにギルドに入るのもいいと思っぞ？」

名無し 「ギルド・・・？」

ギルドに入る・・・確かにそれはいいかも知れない・・・

記憶喪失で・・・薄っすらと残る記憶にはスイレんと良く似た少女が居て・・・

スイレんも記憶喪失で・・・ギルドに入っているらしい・・・

だったら自分もギルドに入るのが良いのではないのだろうか？

クルシス 「無理にとは言わないな、ここの都市の内部は安全だからな

でもな、お前は武器を持っていたらどう？旧式のリボルバー・・・

確か名称はF o g - 1 0 だったか？」

クルシスの言う通りで、名無しはリボルバーを持っている。

正確には自分の物かわからないが、握ってみた感じは

まるで自分の腕の延長の様な感じで、しっかりと狙って撃てば百発百中するのでは？

と言うぐらいに自然な感じな握り具合であった。

そのリボルバーをバッグから取り出す。

名無しはクルシスに渡されたこの街での衣服に着替えていて、

その時に一緒になって渡されたバッグの中に自分の所持品・・・

持っていたのは旧式魔銃F o g - 1 0 だけであるが・・・

そのリボルバーを取り出す・・・

スイレン 「その銃・・・」

と、スイレンが横から銃を取って観察し始める・・・

名無し 「えつと・・・」

その様子を眺める・・・特に乱暴に扱ったりせずに、丁寧に扱っているので問題はないと思った。

クルシス 「んゝ．．．とりあえず、射的場に行くか．．．」

椅子から立ち上がるとクルシスが建物の奥を指差して言った。

クルシス 「あつちに射的場があるからよ、そこで銃を使ってみるよ

使えばその．．．なんだ、記憶が戻るかもしれないからよ」

クルシスはクルシスなりに気を利かせてくれているようだ．．．

クルシスの気遣いを無駄にする訳にはいかないし、

この銃を一度使ってみたかったので射的場に行く事にした。

スイレん 「．．．．．」

スイレんは銃を返した後も無言であった。

第五話 射撃場

Fog-10とは、安定した魔導銃のベストセラーを作り出した会社が開発した、

変り種の魔導銃である。正式名称「Fog-10 前装式回転式拳銃」

シングルアクションで形状はコルト・シングル・アクション・アーミーと良く似ている。

装弾数は六発、使用最高魔法レベル20、生産数は不明。

特徴は使用者の拳銃使用能力と魔法使用能力に大きく左右される性能である、

そのため取り扱いが難しく、価格も他の魔導銃に比べると高い。

これまで初心者が簡単に扱うことの出来る安定性と信頼性、その上安値と言う安定した魔導銃を作り出していた会社が、何故このような魔導銃を作り出したかは不明であるが、

「とある物好きの特別注文品であつたのでは？」等と噂されている。

その関係か「魔導銃取り扱いの上級者を名乗るにはこの銃を使いこなせなければいけない」

と言われていた銃である。

現在では魔銃と言うが、魔法を利用する銃の事を開発当初は魔導銃と言った。

Fog-10を携帯するためのガンベルトを装備して、そこにFog-10を収納し、

射撃場の距離15〜35mに設定された100m四方の射撃場の中心に立つ。

射的場でやった時は30発中18発命中と、全く当たらなかったが、

クルシスが「実際の戦場ならもつと良い成績が出るんじゃないか？俺も実際戦場の方が強いからな」

と言ってくれて、ここの射撃場につれてこられたのである。

ここの射撃場は、射撃者を中心にして全方向に的が現れる&

風景を立体映像として映し出して、実際の戦場の様な感じにすることが出来るのである。

その何もない100m四方の部屋の中心部の射撃者が立つ場所に名無しは立っていた・・・

クルシス 「おう、準備は良いなー、命中精度と的中精度、それと

射撃速度も測るからなー、落ち着いていけよ

I

見た感じお前ならできるからなー」

射撃場に設置されたスピーカーから響くクルシスの声・・・

クルシス 「んじゃー、アナウンスの後に開始だからー頑張れよ」

ブツンツとスピーカーの切り替わる音・・・

アナウンス 「これより立体射撃場での射撃訓練を行います。」

無機質な女性の声が響き渡る――

アナウンス 「訓練レベル1、訓練場所は森です。射撃レベルが高ければ高い程訓練レベルが

上昇します。落ち着いて射撃しましょう。開

始します」

ブウンツと辺りの何もない真っ白の部屋の風景が変わり、木々の生い茂る薄暗い森に変わった・・・

その瞬間に体がガチガチになってしまい自分の意思では動かせない・・・

これは訓練の一部であり、立体映像であり、自分は絶対に安全であると言っ事を

頭では理解していても、心が竦んでしまう・・・

ガサリツと近くの木々の揺れる音・・・心の中の自分はビクツと震え上がる・・・しかし、体は違った・・・

音のした方向が情報として頭の中に滑り込んでくる・・・

その方向を向く・・・銃をガンベルトから引き抜いて魔力を操り、弾丸を弾倉の中に精製する・・・そして、撃鉄を引き起こし、射撃体勢に入る・・・

ガサガサツ・・・バアンツ…ドサリツ・・・

何か黒い影が飛び出してきたが、それが何かを確認する前に引き金を引く・・・

しかし、頭の中にはその敵の情報がすぐさま浮かび上がっていた・・・

そして、何処が急所なのか・・・どうすれば一撃で仕留められるのか・・・

そんな情報が浮かび上がった直後に体が勝手に動いていた・・・

発砲音・・・茂みの向こうで、何かが倒れる音・・・

アナウンス 「必中しました。」

敵に命中させた場合が「命中」、急所に命中させた場合が「的中」、一撃で仕留めた場合が「必中」。

アナウンス 「訓練レベルを上昇させます、レベルは3です」

アナウンスが終る・・・と、ガサリガサリと草木が揺れる音が複数
の方向から・・・

敵の居場所がまるで手に取る様に頭の中に浮かび、対処法も浮かぶ・
・

何も慌てることも無く空いている手の親指と小指で掌を扇ぐように
コッキングし連続射撃を行う

体勢をとる・・・この動作をファニングと言う。

ガサッ・・・バアンッ・・・ドサリッ・・・ガサッ・・・バアンッ・
・ドサリッ・・・ガサッ・・・バアンッ・・・ドサリッ・・・

飛び出してきた・・・敵を瞬間で排除する。

敵の急所と敵がどの様に飛び出してくるか、何処を狙えば良いか・
・全てが頭の中に浮かび、

自分が何かを考える前に体が勝手に動いて、敵を排除していた・・・

名無し 「え・・・これが・・・俺？」

戸惑う間も無く、次のレベルの訓練が始まる。

第六話 正確無比

バンッバンッバンッ・・・

連続での発砲音・・・画面に映る名無しは戦場慣れした動きをしている・・・

まるで獲物を狙う猛禽類の様に見られただけで切断させそうな目をしている・・・

クルシス 「すげえ・・・記録更新しそうだぞ・・・」

現在の訓練レベルは最高レベルの20である・・・

訓練レベル15あれば十分な実力と言われる。自分は訓練レベル18が限界であった・・・

大剣使いと銃師では感覚が違つかもしれないが・・・

それでもこのレベルに到達して殆どの的を必中させるのは凄い・・・

ここは射撃場の制御室である。入り口以外の方向に機械がびっしりと並んでいて、

複数のディスプレイに射撃場内部での訓練の様子がリアルタイムで表示されている。

スィレンは後ろでディスプレイの一つをジッと見つめている・・・

クルシス 「そろそろ訓練終了だな・・・そろそろ魔力切れになるかもだからな」

パネルを操作して訓練終了の合図を送ろうとする・・・

アナウンス 「訓練は終了です。訓練は終了です。元のフィールドに戻します。」

射撃戦績はランクEXです。命中率100%、的中率97.38%、必中率90.27%、
平均反応速度2.8秒、最速1.11秒です。」

アナウンスが終了し、訓練が終った・・・

クルシス 「ふう・・・すげえな、ここのギルドの誰よりも強いじゃねえか・・・」

ここのギルドでの銃師の最高記録は命中率100%、的中率34.73%、必中率13.02%である。

それを圧倒的に上回る戦績である・・・

クルシス 「この戦績なら・・・」

・ 今の戦績と立ち回りを見れば相当な実力の持ち主なのはわかった・・・

そして、これだけの實力なら、データバンクに記録が残っているかもしれない・・・

名無しは射撃場の中心部分に立ちすくしている・・・

クルシス 「ああー・・・しゃーねえ、行くか」

名無しを迎えに行く為に射撃場に向かう・・・

スイレん 「えと・・・はい」

その後をスイレんが追ってくる。

射撃場の中心で魔銃を握り締めて呆然と立ち竦む・・・

自分がこんなに強かったなんて・・・

それ以前にどの敵に対しても瞬間的な対処法が思いつき、それを実行していた・・・

一瞬何かの悪い夢か何かでは無いかと疑うが・・・

それは紛れも無く現実であり・・・右手に握った銃の重みが現実だと知らしめてきた・・・

クルシス 「おーい、大丈夫かー？」

肩を叩かれ、ビクツとした後に、ようやくすぐ近くまで

クルシスとスイレんがやってきていた事に気がついた。

クルシス 「何か思い出したか？」

こちらを氣遣う様に声をかけてくる・・・

名無し 「いえ・・・スイマセン」

思い出した事は何も無い・・・わかった事ならある・・・

多分・・・自分は戦闘を経験した事がある・・・

意識としては怯んでいても、体としては怯む所か何だが慣れ親しんだ場所に居る様であつた・・・

自分が誰なのか・・・そこがとても氣になる・・・

クルシス 「何故謝る？まあ、良いけどな、それよりお前凄いな

クに問い合わせれば
あの戦績だ、相当な実力者だぜ？データバン

お前が何処の誰だかわかるかもしれない」

名無し 「本当ですか！」

自分の事が判るかもしれない・・・それを聞いて沈んでいた気持ちが浮き上がる・・・

クルシス 「スイレンと名無しが知り合いだったなら、名無しに関して何かわかれば

スイレンに関して何かわかるかもしれない

ぞ。」

氣を利かしてスイレンにも声をかけるが肝心のスイレンは上の空で

ある・・・

スイレ
「・・・・・・・・」

クルシ
「スイレ？スイレ、どうした？」

スイレ
「え？ああ、何にも無いです」

一瞬だけ名無しの顔を見た後にすぐに何事も無かったかの様に振舞う・・・

クルシ
「そうか・・・無理はするなよ、じゃデータバンクを調べに行こうぜ」

名無し
「はい」

スイレ
「わかったわ」

握り締めていたFog-10をガンベルトにしまおうとする・・・

手が硬直しており、引き剥がすのに少しだけ苦勞した。

そして記録を管理する為の 大型コンピューターの管理室に向かう。

第七話 記録管理室

大型コンピューターの管理室は関係者以外立ち入り禁止らしい・・・

関係者と言うのはデータの管理を受け持つ支援関係の仕事についているギルド員の中の

資格を持った者だけらしい・・・

その為、データバンクへの接続は直接は出来ず、管理者に頼んでバンクにアクセスしてもらい、

必要なデータを引き出してきて閲覧するだけらしい・・・

そして、その受付カウンターでクルシスと管理者の女性が揉めている・・・

クルシス 「この戦績だぞ！無いなんて事があるわけねえぞ！」

ドンツとカウンターを両手で叩き、相手に唾を欠きかける勢いで怒鳴りつける。

女性 「無い物は無いです。」

相手の方は全く相手にせずに落ち着いた対応をしている・・・

クルシス 「この實力だぞ？今時個人で生き残るのは不可能だ、だ

からどこかのギルドに加入してる

はずだ、だからデータバンクのどこかに残ってるはずだ！」

クルシスは引き下がるつもりは無いらしい・・・

女性 「・・・はあ・・・貴方はいつも強引ですね、そんなじゃモテませんよ？」

クルシス 「うぐっ・・・」

痛いところを突かれたのかクルシスは黙り込む・・・

スイレン 「すいません、本当に無いですか？本の小さな事でも良いんです、何か合ったら・・・」

スイレンが必死になって頼み込む。と、女性が少し困った顔をした後に溜息をついて口を開いた。

女性 「無い事はないのよね・・・」

クルシス 「あるじゃねえか！」

クルシスが先程のお返しとばかりに女性を丸め込もうとするが・・・

女性 「人の話は最後まで聞きなさい、だからいつまで経っても訓練所教官止まりなのよ」

クルシス 「うぐっ・・・」

また痛いところを突かれて黙り込んでしまった。

女性 「それでね、その情報っていうのが、本当にくだらない
と言つかありえない記録だから・・・
それに、そうとう
古い物なのよ」

スイレ 「その情報をください！」

スイレ はそれでも情報を欲した・・・

女性 「だったら、端末を貸してくれる？」

スイレ 「はい」

スイレ は自分のポーチの中から小型の通信端末の様な物を取り出して女性に渡した。

女性 「概要に関しては今説明するわね」

そう言う女性とその情報——記録に関して説明を始めた。

まず射撃場の名無しの得点と煮たような記録に関して、これは五十年前のこの都市に

ギルドが開設された直後辺りの記録。

得点は「命中率100%、的中率98・97%、必中率98・23%」であった。

そしてその記録を出したのが・・・リュウと言つ名の少年であつたらしい。

そのリュウに関しての個人情報記録は残っていない。

ただ、記録の中の日記の部分にその名が登場していたらしい。

・記録重要度D 記録番号D1-83

日付：失暦 二二一七年 十一月 二八日 記録者：決戦唯一の生き残り

運命を決するはずの戦闘は終つた。

俺一人を残して他のメンバーは全滅してしまった・・・

この都市は自律防衛システムによって消滅する事は無いだろう・・・

しかし・・・この世界を蝕む根源を絶つ事は出来なくなつてしまつた・・・

私の役目は仲間達が今すぐ帰つてきてても良い様にこの都市で帰りを待ち続けるだけである。

そして、リュウとルイの帰りを私は待つ必要がある。

リュウは約束をした「俺は必ず帰る」と・・・

だから、私はこの都市で仲間の——そしてリュウとルイの帰りを待つ——

これが記録の全てであるらしい・・・

この都市は五十三年前に大々的に起きた魔王と名乗る者の討伐作戦の重要拠点であつた・・・

その作戦は決行された・・・

元々、この都市の近く・・・と言っても相当遠いが、

そこに魔王を名乗る者が住まう場所があった・・・

まるでRPGゲームに登場する魔王城そのまんまの城が構えていた・・・

そこに、ここの都市に集まった精鋭達が突撃していったのである。

人数は合計で200人弱・・・武装は完璧。これで魔王を討伐できれば、

この荒廃の時代が終ると信じて突撃していった・・・

しかし、その部隊は一人を残して全滅・・・

その生き残りの一人が記した日記らしい・・・

その日記に「リュウ」と言う名無しと同じ戦績を出した少年が居たらしい・・・

しかし、五十三年も前の話なので、名無しとは無関係である・・・

しかし、とても気になった・・・そして、情報管理の女性に話を聞くと、

この日記を記した人はまだ生きていると言う・・・

毎日、今は使われていないはずの第一ゲートで、仲間の帰りを待っているらしい・・・

クルシスがその人物の所まで案内してくれるそうだ・・・

第八話 過去の記録

クルシスの案内でやってきたのはゲート管理システムが破壊され、ゲートとしては二十年前から使われては居ない第一ゲート・・・

使用されているゲートなら、レーザーウォール光線防壁でゲートを閉じているが、今はもう使われていない為、強化合金による隔壁が降りている。

その隔壁の前の所に杖について佇む老人が居る・・・老人は隔壁を見ていた。

そんな老人にクルシスが声をかけた。

クルシス 「おう、爺さん今日は帰ってきそうか？」

老人 「ふむ・・・いつか帰ってくるわい・・・何か用か？」

老人はこちらを見ずに、隔壁を見ながら答えた・・・

クルシス 「過去の射撃場での最高記録に関して少しな・・・

」

老人 「最高記録？リュウの記録がどうした？」

どうやら老人はこちらを見る気が無いらしい・・・

クルシス 「いやぁ・・・それと同じ記録を出す奴が居るんだが・・・」

老人 「何!？」

その時になってやっと老人はクルシスたちの方を見た・・・

クルシス 「そいつが記憶喪失らしくてな、まさかとは思うが・・・

って、話聞いてるか？」

老人 「リュウ・・・ルイ・・・」

その老人はクルシスの話なんか聞いていなかった・・・

名無しとスイレンの方を見て驚いた顔をしていた。

クルシス 「んあ？」

名無し 「えっと・・・」

スイレン 「・・・・・・・・・・？」

老人 「リュウにルイじゃないか、やっと帰ってきたのか・・・」

老人は名無しとスイレンを懐かしそうに眺めながらそんな事を言っていた・・・

名無し 「俺を知ってるんですか？」

老人 「知ってるも何も一緒に魔王討伐に参加した仲じやぞ・・・」

スイレ 「魔王討伐作戦は五十三年前でしょう？」

クルシス 「その前に爺はいつこいつらと出会ったんだよ」

老人 「五十三年前、魔王討伐作戦決行の二日前じゃ」

クルシス 「・・・そのときに会ったリュウとルイって奴にこいつら二人がそっくりだと？」

老人 「そっくりも何も同一人物じゃろ？」

クルシス 「こいつらは記憶喪失なんだよ・・・と言うか、こいつらが五十三年前のリュウとルイって奴と同一人物ってのはありえねえだろ？」

スイレ 「はあ・・・」

スイレ 「んが思いつきり溜息をついた・・・」

自分と関係のない話っぱいので落胆したのである。

老人 「うむ・・・とりあえずリュウに渡したい物があるのじゃ」

老人はそう言うと言ったから何かそこそこ大きい物を取り出し差し出してきた・・・

名無し 「魔導銃・・・」

クルシス 「魔銃だな・・・見た事の無い形式だが・・・どこの設計だ？」

老人が取り出したのは簡素なつくりの魔導銃であった。

片手で取り扱う風には見えない感じの銃である。

銃身が長く、遠距離からの狙撃を行うのに適している形状をしている・・・

よく見ると光学標準器スコープが付属している。

老人 「おぬし・・・リュウが戦場に忘れていった銃じゃ」

名無し 「戦場？」

老人 「魔王城じゃ」

スイレ 「そこに行けば何かわかるかも・・・」

クルシス 「んあ・・・クエストで旧魔王城の簡単な奴あったかなあ・・・無かったら探索で・・・」

老人からその魔導銃を受け取って、それを背中に背負った。

名無し 「ありがとうございます」

老人 「おれなぞいらぬわ、それよりクルシスよ、嫌な予感がするわい・・・」

行くなら注意するのじゃぞ」

クルシス

「ああ、わかったぜ、じゃあな」

老人

「ふむ・・・わしは少し寝るかのう・・・」

老人とはそこで別れた。

その後、クエストカウンターで手続きを済ませ、

クルシス、名無し、スイレン、ミラーズの4人で旧魔王城の探索に向かった。

第九話 旧魔王城

古き時代の中世の城を思わせるつくりの大きなレンガで出来た建築物・・・

今は使われる事も無く、大きな戦闘があつたのかとどこどこに色々な痕がある・・・

その城は高い山の上に建つていた・・・

城の入り口側はなだらかな斜面が続いているが、

反対側は切り立った崖であつた・・・

崖の下の方には、川が流れていた。

その旧魔王城は王座があるべき所は何か大きな爆発でもあつたのか、

崩れ去つていた・・・王座の後ろの壁は消し飛ばされていて、

その王墓のすぐ後ろのの穴からは切り立った崖が確認できた・・・

戦場であつた事を思わせるような爆発痕等が数箇所残つていたが、

五十年もの時を経て、殆どの物は腐敗なり劣化なりして確認できなかった・・・

その城の入り口の大広間を見たときに一瞬だけフラッシュバックが

見えた・・・

——燃え盛る炎の中・・・押し寄せる魔物の群れ・・・そこに切り込む肩を並べた仲間達・・・

後ろから戦車が続き・・・戦車の砲口から電撃光線スタンレイが発射され・・・

敵陣の中央部分の大多数の魔物が消し飛ぶ・・・

横に居た二十代後半の青年がこちらに何かを叫ぶ・・・

そして、自分は敵陣に出来た穴から奥に進む・・・その後を少女がついて来る——

そんなフラッシュバックだった・・・その光景の中で見覚えのある物が目の前に佇んでいた・・・

砲口を天に向け・・・地面に車体がめり込んだ戦車である・・・

旧魔王城に来るのに受けたクエストは「哨戒」であつた・・・

近頃、ここの辺りで中型～大型の魔物の目撃情報が多数寄せられた為、

旧魔王城の辺りを哨戒して、中型の魔物が居るのであれば討伐。

大型の魔物が確認されたのであれば正式な依頼として数十人でチー

ムを組んで討伐すると言う、

前調査為にやってきたのである。

クエスト人数は最高6名だった。

予定通りに名無し、スイレン、クルシス、ミラーズの4人で調査に向かった。

旧魔王城につくまでは特に魔物と出会う事も無く、問題は何も起きなかった。

旧魔王城についても特に小型の魔物とも出会う事も無かった為、

記憶の手がかりになりそうな物を手分けして探しているのである。

そこで、名無しは入り口の大地に頓挫する軽戦車を見つけたのである……

名無し 「……スタン……レイ……」

スイレン 「どうしたの？」

その戦車に手を当てて考え事をしていたら、スイレンに声をかけられた……

名無し 「いや……何か思い出せるかと思ったんだが……
一瞬だけ何か見えた気がしたが……」

良くわからなかった……」

スイレ 「・・・そう・・・」

スイレンはそう言うとミラーズが居る方へと行った・・・

クルシス 「うむ・・・これは軽戦車だな・・・型番は知らんが・・・」

と、今度はクルシスが名無しの元にやってきた。

クルシス 「何か思い出せそうか？」

名無し 「ここには来た事があると思うんですが・・・なんだか、こう・・・靄がかかっている感じで・・・」

クルシス 「ここに来た事がある？・・・倒れてた河原は確か崖下の川の下流だよな？」

名無し 「そうなんですか？」

クルシス 「ああ・・・お前は記憶喪失だったな・・・確かお前が倒れてた河原の上流がここに

当たったと思ったが・・・何か関係あるのか？」

名無し 「さあ・・・わからないですね」

クルシス 「そうか・・・」

そう言うところクルシスは沈黙し何かを思案し始めた・・・

名無しは名無しで自分の考えをまとめてみる事にした・・・

多分だが、自分はここに来た・・・あの老人が会ったと言うのは自分だ・・・

そして、ここで大きな戦いがあつた・・・その戦いに自分と・・・スイレンも加わつたのだろう。

そして、その戦いの最中・・・自分は・・・魔法に巻き込まれ時を越えた・・・のではないだろうか？

時空転移や時間転移の魔法は未だ開発されていないのでわからないが、

何らかの転移魔法の失敗によつて自分は五十三年の時を越えたのは？というのが

現段階での名無しの考えだ。

とはいえ、転移魔法の失敗によつて時を越えると言うのは考えにくい・・・

転移魔法が失敗したのであれば、次元の裂け目の中を永遠と漂っているはずである・・・

考えて・・・考えて・・・思索を続けるが、特に思い出す事も無く・・・

奥に進んで王座についても、特に何も思い出せなかった・・・

落胆しながら王座のある大きな部屋に入る・・・

クルシス

「ん・・・何か音がしなかったか？」

クルシスが何かに気がついたように辺りを見回す・・・

第十話 接敵

クルシスの一言で皆がそれぞれの獲物を掴み警戒態勢に入る、

クルシスは大剣を、名無しはリボルバーを、スイレンは長杖を、

ミラーズは短剣をそれぞれ手に取り構える。

前衛はクルシス、ミラーズの二名、後衛が名無しとスイレンである。

クルシス 「誰か居るな」

ミラーズ 「だね、その王座の後ろ、誰？」

王座のある大きな部屋、王座の後ろの壁はごとりと消失している。

その王座の入り口から死角になっている場所から誰かが現れる・・・

??? 「あはは・・・見つかったねえ・・・流石

この時代最強の剣士さんだなあ」

現れたのは女の子であった・・・ワンピースを着たさらさらの黒髪の10歳程の女の子・・・

・ まるでかくれんぼをしていて見つかったみたいな雰囲気であるが・・・

こんな所に一人で居る女の子・・・あからさまに怪しい・・・

いくらここの辺りの魔物が討伐されて減っているとはいえ、

女の子一人で居るのは危険極まりない・・・イコールここに居るこの女の子は人間ではない・・・

魔物の中には完全に人間に擬態する物も居る・・・

大概、地下都市の外に居る武装していない人間は魔物の擬態である。

クルシス 「誰だお前・・・」

女の子 「ふう〜ん・・・偉そうな剣士さんだなあ・・・まあ、いいけどねぇ・・・

貴方に用は無いのーだから黙っててくれるかなー？」

その女の子は笑みを浮かべながら話しかけてくるが、目が笑っていない・・・

質問に対して答えない・・・対外の場合は住まう都市名と自分の名所属ギルドを言うのが普通・・・らしい

だが、女の子はその質問を無視している・・・

女の子 「私はお兄ちゃんを迎えに来ただけだからねぇ〜」

その女の子と眼が合う・・・

名無し 「兄・・・？誰だお前・・・」

クルシス 「お前の知り合いか？」

クルシスが名無しに聞いてくるが、生憎と記憶喪失中なので覚えて
いる訳が無い。

女の子 「あるえ？ああ〜そうか〜今回のお兄ちゃんはまだ
私の事知らないよね〜」

自己紹介から〜？面倒くさいなあ〜もう三十回
目だよー？」

一人で何かを納得したように両手を打ち合わせてから、ニコニコ笑
顔で語りかけてくる・・・

女の子 「私はあー・・・あー」

と、女の子が右手を右側に突き出す・・・その右手が肘の辺りまで
次元の裂け目に飲まれている・・・

女の子 「やつぱ自己紹介やめー、今回のお兄ちゃんが私の
言う事聞いてくれなかったら

結局消しちゃうんだしー、言う事を聞いてくれ
るお兄ちゃんに自己紹介した方が

楽だよなー？何でこんな簡単な事に気が付かっ
たんだろー？」

その女の子が右手を次元の裂け目から引き抜く——その手には機関銃が——

咄嗟にリボルバーを女の子に向け——

——ガギッ——ガンッガラランッ・・・

手に持っていたはずのリボルバーは後ろの床に落ちる・・・

女の子 「流石お兄ちゃんだなあゝ油断できないよゝ」

そう良いながら女の子はいつの間にか左手に持っていた拳銃で

名無しのリボルバーを打ち抜いたのであった・・・

女の子 「さあーて、話し合いの時間だよー？はい、武器を床に置いてねー

変な動きをしたら次は頭を消し飛ばしちゃうからねー？」

片手で扱える風には見えない重厚な機関銃を片手で操りこちらに向け・・・

まるで見た目相応の幼さを残した楽しげな声で忠告をしてきた・・・

ミラーズ 「話し合い？武器を突きつけて話し合いだなんてねえ・・・それは脅迫って言うのよ？」

ミラーズが短剣をゆっくりと地面におきながら女の子をにらみつけ

る・・・

スイレンは足元に長杖を置く・・・クルシスが大剣を床に置く・・・

女の子 「はぁーい、良い子良い子ーじゃー、お兄ちゃんは一緒に帰ってくれるー？」

次元の裂け目・・・数多くの道具等を持ち歩きたい時等に道具を保管しておくための魔法・・・

次元倉庫は人間のみが使う事が出来るようになってい魔法だ・・・
ディメンションゲート

イコール魔物ではない・・・だが、人間でもないだろう・・・じゃあ何なのだろう？

名無し 「帰る？何処に？」

この場合は落ち着いて相手から情報を聞き出すのが先決だ・・・

相手を刺激しないように質問を試みる・・・

クルシスとミラーズは名無しの意図を悟ってくれたようで、黙っている・・・

スイレ 「名無しを知っているの！ねえ、教えて、私の事は知らない？」

スイレンは焦っているのか怒鳴りつけるように相手に質問をする・・・

・

女の子

「はぁー・・・質問は受け付けないんだけどー？」

明らかに不機嫌になっている、これは不味い。

第十一話 不意打ち

貴重な情報を求めて、スイレンは相手の様子を伺う事もせずにかける。

スイレン 「お願いっ、私について知ってる事を教えて！」

向けられた銃口を意識しながらも横に居るスイレンを落ち着かせるために声をかけようとするが、

その前に女の子がスイレンの足元に向かって威嚇射撃を行っていた、

スイレン 「・・・っ!!」

女の子 「黙れって言ってるのわからないかな？次は頭いくよ？」

その不機嫌な声色から次は無いと言っのが感じ取れる・・・

スイレンは余りの出来事に驚いて硬直してしまった。

女の子 「んー・・・帰るって言ったらお母様の所に決まってるじゃん？」

先程の不機嫌な声色が完全に消えていた・・・まるで別人である。

今のは名無しの質問への回答だろう・・・お母様？

名無し 「お母様？母さん？俺の母さん！？」

女の子 「あれ？反応がおかしいなあー……今回のお兄ちゃんは何か変だよー？」

女の子は不思議そうにこちらを見る。

女の子 「あー、記憶喪失のばたあーんかあーこのばたあーんが一番面倒くさいなあー」

名無し 「パターン？何の話だ？」

女の子は左手に持っていた拳銃を弄びながらこちらを見て溜息をついた。

女の子 「じゃー説明するねえー」

まるで昔話を語るような調子で、淡々と語っていく内容は意味のわからないものだった。

貴方は大罪を犯しました。それはとても重い罪でした。産みの親である母親を裏切る大罪でした。

お母様は大いにお怒りになりました。それと同時にお母様は大切に育てた子供に裏切られ、

心に大きな傷を負ってしまいました。そして貴方は家を飛び出していきました。

お母様は貴方がいつまで経っても戻ってこないの、心配になって兄弟に貴方を探させました。

私は貴方を探している兄弟の内の一人です。

淡々と語る女の子は語り終えた後にこちらを見る。

女の子 「判って貰えましたか？」

その瞳はまるでガラス玉のように無機質でこちらを威圧してきていた。

名無し 「俺が犯した大罪とは？」

女の子 「それは、貴方が人間を愛してしまった事です。」

名無し 「人間を愛する？」

女の子 「そう、人間を愛してしまった、そして人間を庇おうとしたのです」

名無し 「意味がわからないぞ！」

女の子の口から発せられる言葉はまるで機械から発せられる無機質な音のようだった。

女の子 「私の説明で理解していただけないのですね？」

すると女の子の瞳の色が変わった・・・無機質なガラス玉の瞳から

女の子らしい生き生きした瞳になる

女の子 「もう今回は最初から諦めちゃおう、どうせ次の世界に行けばお兄ちゃんなんて

居る訳だしさあー、よし、そうと決まったらこのお兄ちゃんの排除かなあー」

いきなり女の子は早口でそう言うと可愛らしい笑顔を浮かべ——こちらを見る——

女の子 「これで何度目かな？お兄ちゃんを排除するのは」

そう言うと機関銃の引き金を引かんと——ガツキーンツ——

ミラーズ 「何か知らないけど、貴方を捕獲するわね」

女の子 「……………」

ミラーズがバックから別の短剣を取り出し、高速で投げつけ、銃口を逸らした。

その隙にクルシスが大剣を拾って女の子に接近を試みる。

名無しもその隙にリボルバーを回収、スィレンが長杖を掴み、魔法の詠唱に入る。

ミラーズは最初に床に置いた短剣を回収し投擲した短剣を回収に向かう。

その間に女の子が機関銃をクルシスに向けて発砲。

クルシスが大剣を盾のように使い機関銃の攻撃を防ぐ。

その間にリボルバーに装填されていた弾丸の種類を高速で変える。

スタンバレット
電撃弾のレベルである。相手を痺れさせる程度の威力の弾丸。殺傷能力は無い。

その弾丸に装填しなおした時にはミラーズが投擲した短剣を回収し、両手に短剣を持って

女の子に攻撃を仕掛けていた。と、視界の端つこにクルシスがいた。ドゴツと言っ音・・・

横に立っていたはずのスイレンの姿が消えていて、

女の子に切りかかっていたはずのミラーズも消えていた・・・

背後の壁に何かがぶつかる音が響いた・・・

スイレンが居た場所には詠唱中の魔方陣だけが不自然にその場に魔法の痕跡を残していた・・・

女の子 「貴方達じゃ私に勝てないよ？」

先程の反撃が一転、またしても追い詰められてしまった、

女の子は余裕そうな顔でこちらを見ている、

先程の一手、ミラーズの攻撃は完全に不意打ちのはずだったのに、

完璧に対処してきた。

クルシスを^{エアショット}空気砲で吹き飛ばし、ミラーズを蹴り飛ばしてスイレンにぶち当てた。

普通の人間が出来る事ではない・・・

第十二話 辛勝

奇襲を全て回避され、銃口を向けられる。

こちらが何らかの行動を起こす前に確実にその銃が火を噴いて

自分の体を粉々に消し飛ばすのが情報として具体的数値と共に頭の中に表示された。

女の子 「お兄ちゃん程の性能を持っていればわかるよね？勝てないのは」

無邪気な笑顔と人間なんぞ一瞬で肉塊に変えてしまふ凶悪な銃口を向けられ

硬直してしまう・・・クルシスもミラーズもスイレノも誰も援護に入れない・・・

頭の中にはありとあらゆるパターンの抵抗方法が示され・・・

その内の最も被害の少ない抵抗方法を体が勝手にとる・・・

瞬間で背負っていた長銃を取り、自分の足元に向ける、その行動を見逃さずに女の子は引き金を引く。

ギューイイインツ・・・まるでチェーンソーの様な銃声・・・その銃声に混じって甲高い銃声・・・

長銃から射出された弾丸は空気砲のレベル4、人間の体を簡単に吹

き飛ばす程の

魔法的風を引き起こす弾丸である。

その効果が瞬間で発動し、自分の体が風によって吹き飛ばされた・

一瞬前まで名無しが立っていた場所に数十発の弾丸がめり込む。

背後の壁に上手く両足で着地して、衝撃を完璧に消して、地面に音も無く着地する。

長銃に装填された弾丸を変化させる。

エアショット ディーブマジック
空気砲のLv4から吸魔弾に変化、

女の子が銃口を——立ち上がるうとしていたクルシスに向けた——

この動きは完璧に計算できていた、ディーブマジック吸魔弾をクルシスの前の地面に向かつて撃ち出す、魔法を無力化する防壁がクルシスを囲むように作り出される。

そこに女の子の放った弾丸が何発も当たるが、

吸魔力場によって魔力を吸収され、弾丸は虚空へと消えていく、

女の子は舌打ちをすると、今度はミラーズとスイレンの方向に銃口を向ける——

その動きも計算の中に完璧に入っている、リボルバーを引き抜いて、長銃を片手でミラーズとスイレンの居る方向に向け、リボルバーを、女の子の持つ機関銃へ向け、両方の引き金を同時に引く。

女の子 「っ!？」

長銃に装填されていたのは勿論、ディープマジック吸魔弾であり、魔弾を消滅させる。

リボルバーに装填されていたのはスタンバレット電撃弾のLv1、相手を痺れさせる程度の効力しか持たない弾丸、その弾丸は見事に機関銃にヒット。

女の子自体を狙っていた場合、確実に回避されていたのだろう。

そこで、明らかに鋼鉄製の機関銃を狙って、感電させたのである。

女の子がビクンツと一瞬だけ体が反応した後に、その場にドサリツと倒れこむ、

その拍子に機関銃がガラランツと音を立てて転がった。

女の子 「あはは・・・今回のお兄ちゃんには負けちゃったか・・・まあ、良いけどね・・・

忘れたら駄目だよ“私達は貴方を消す”それがお母様の望みであるからね」

女の子がそう言うと、辺りの風向きが変わる。

女の子 「最後に一言。過去を変えると未来が変わる。未来を変えても過去は変わらないけどね」

最後に目を開けていられないほどの強風が吹き荒れる――

目を開けた時にはその女の子と機関銃はきえていた。

クルシス 「うう・・・なんだったんだ・・・」

クルシスが大剣を杖のように使ってこちらに歩いてくる。

スイレン 「いたたた・・・」

ミラーズ 「あの子は新種の魔物かしら？とりあえずギルドに報告しておかなきゃね」

スイレンとミラーズも少し遅れてやってくる。

クルシス 「人間の言葉を話せる、理解できるという辺りから最上位の魔物ではないか？

最上位ともなれば魔法や魔銃を使えてもなんら不思議は無い、

まあ、こんな所で話し合うよりは都市に戻ろうぜ。

「

ミラーズ 「賛成ね、名無しにも話を聞きたいし」

ミラーズとクルシス、スイレンの三名が名無しを見る。

名無し 「えっと？」

ミラーズ 「あれよ、あの戦闘慣れした戦い方、というか完璧に先読みしてたとは思えない

戦い方よ、アレはどう考えても一般市民じゃないって事はわかるわ、

その上、あの女の子が言うには“人間を愛した罪”とやらに關してもね

色々判らない事まみれなのよ、そこら辺に關して何か思い出した事、

どんな些細な事でも良いから都市についたら話なさい。」

名無し 「はい」

と、その時にドォーンツと何かが崩れる音。

ミラーズ 「え？」

スイレン 「あそこ、城の裏手」

スイレンが指差す先には城の裏手の崖の下に広がる広大な森があった。

そこの一角に砂煙が立ち上がっている所がある。

第十三話 単独行動

砂煙が立ち上がる場所を確認するが、やはり人間の肉眼での確認は不可能である。

クルシスが手を筒の様にして、その筒を覗き込むようにして、

砂煙が立ち上がる場所を見る。

手に魔力が宿っているので、多分遠見の魔法を使っている。

遠距離を確認するのに使われる初歩的魔法である。

クルシス 「良く見えんぞ、何か大きな魔物が居るな」

ミラーズ 「魔物？」

必死で砂煙の上がる場所を見るが、

必死に目を凝らしても、確認できるのは砂煙が上がっているだけである。

と、体が勝手に動き、魔力を目に集め始める。そして、口が勝手に言葉をつむぐ。

名無し 「スラッシュスパイダー魔物名称、切裂蜘蛛

フルークフリーデ状況、15〜16歳程の蝙蝠獣人の少年と10〜11歳程の蝙蝠獣人の少女が

スラッシュスパイダーに襲われている。少年の武

装は短剣

少女の武装は――

クルシス 「おい、お前・・・」

と、その台詞を半ば強引にクルシスが止める・・・

その場に居る全員が名無しに注目している。

名無し 「あれ・・・？」

しかし、名無し自身も今の自分の行動にびっくりしていた。

今は、視野距離を魔力で強化して、あの戦場を確認し、

戦場の状況把握と情報伝達を高速で行ったのである・・・

名無し 「少年と少女の救出、魔物の討伐をする

脚力強化、直線距離1500メートル

到着までの時間55秒、突撃する。」

いきなりだ・・・まるで自分の体が勝手に動いている感覚・・・

足に魔力を溜める。脚力の強化が完了、リボルバーを手に持ち、

王座の後ろに空いた大穴に向かって走り出す・・・

クルシス 「おい！何してる！」

ミラーズ 「ちょっ！待ちなさい！」

スイレ
ン 「っ！」

クルシス、ミラーズ、スイレ
ンの三名は、名無しの急な行動にびっ
くりしていた、

その声を振り払うように、大穴から外に飛び出す――

――飛び出した先は足場の無い崖――

体は重力にしたがって落ちていく・・・浮遊感・・・

後ろからクルシスとミラーズが何かを叫んでいるのが聞こえたが、
体は言う事を聞かない・・・

体が勝手に動く・・・地面がどんどん近づいてくる・・・

右手に握っているリボルバーに装填された弾丸を変化・・・

瞬間で空気砲Lv4に変化・・・
エアショット

地面にぶつかる・・・いや、地面ではない、大きな川である・・・

そこにぶつかる寸前に右手に握ったリボルバーを地面に向け、発砲。

エアショットの効力で空気が破裂する・・・そこに、自分の体が
落ちる・・・

そのエア―ショットの効力で、着地の衝撃は完全に消滅する。

音もなく地面に着地し、そして瞬間で砂煙の立ち上がる森の一角へを走り出す・・・

森の中を疾走して、55秒足らずで目的地に到着。

目的地は森の一角の土煙が上がっている場所、

木々がなぎ倒され、また振動が起き、そして土煙が上がる。

その先に少年と少女の姿がある。

少女の手を掴み必死で走って逃げている。

その後を体長20メートル程の大蜘蛛が追いかけている。

大蜘蛛が一步を踏み出すたびに地面が振動し、木々がなぎ倒される。

大蜘蛛の歩みはあまり速いわけでもない、しかし人間の足で必死に走っても

一歩一歩の長さの違いによって差は広まるどころか逆に縮まってしまふ。

フルークフリーデ
蝙蝠獣人特有の翼を使って逃げれば良いものを、必死に走って逃げているせいで

もうすぐ追いつかれそうだが、手に持つリボルバーの弾薬を変化させる。

ファイアバレット
火炎弾のLv5に、威力は最高値、鉄をも溶かす灼熱の爆炎を放つ弾丸。

背負っている長銃の弾丸をフルメタルジャケット完全被覆鋼弾にする。

大蜘蛛は少年と少女に気を取られ、こちらに気がついた様子はない。

銃口を大蜘蛛の頭に向け、引き金を引く。勿論急所を狙い、

動く大蜘蛛の動きも完璧に予測した上での射撃なので外れる訳がない。

その発砲音が辺りに響き渡る前に弾丸は蜘蛛の頭に吸い込まれ、

爆炎を上げる・・・爆発の衝撃が少年と少女をこけさせる。

急いで少年と少女のもとに近付こうとする――

と、そこで頭を炎上させている大蜘蛛の背中がミシリと音を立てて裂け始めた・・・

名無し 「目標は雌個体であると判明、固体状態から子を宿した物と判明」

口から、その敵の情報を漏らしつつも、倒れて気絶している少年と少女のもとに向かう。

名無し 「大丈夫か？」

少年 「う・・・うう・・・」

少年の方はうつすらと呻き声を上げるが、どうやら立ち上がれそうにない様だ・・・

少女は少し離れた場所に倒れている。

第十四話 切裂蜘蛛

少女の方の容態を見る為に近付く――

と、その少女がいきなり立ち上がり、こちらに突っ込んできた、

咄嗟にリボルバーを引き抜き、引き金を引く――

銃弾は少女に当たらず、少女は全体重を乗せ、名無しにタックルをしかけてきた。

名無し 「うぐっ」

少女に押し倒され、上に跨られる。

と、気がつけば少女は名無しが背負っていたはずの長銃を名無しに向けていた。

少女 「動かないで」

名無し 「まで、俺は――

咄嗟に弁解をしようと口を開くが、銃口を首に押し当てられ、黙るしかない。

少女はゆっくりと名無しに銃口を向けながら少年に近付いていく。

少女 「大丈夫ですか」

こちらを油断無く睨み付けながら、少年に声をかける。

少年 「うう・・・ああ、大丈夫だ」

少年もゆっくりと立ち上がる、この状態ではできる事はない様なので

その二人を観察してみる事にした、

少年の方はくすんだ銀髪の野性味のおふれる感じの名無しと同年かちよつと上の少年である。

とそこで気がつく、少年の蝙蝠獣人特有の翼膜の張られた翼はボロボロになっていた。
フルークフーデ

先程の爆炎に焼かれた訳でも、先ほどの衝撃で破れた訳でもない、

どうやら、もともと使えるような状態ではないらしい。

少女の方も少年と同じくくすんだ銀髪をしているが、整っている顔立ちから

美少女と呼んでも差し支えない10〜11歳程の少女である。

少年はこちらをにらみつけ、傍らに落ちている名無しのリボルバーを見つけ、それを回収した。

少年 「何だお前、俺達に何のようだ」

少年は左手に短剣を持ち、右手でリボルバーを向けてきた。

名無し 「質問は別に良いが、出来れば銃を返してくれ」

とりあえず、刺激しない様に銃の返却を求めている。

少年 「質問に答えてくれ」

少年はこちらを睨み付けてくるが、敵意を向けられてはいないようだ。

名無し 「魔物から助けた、これでは駄目か？」

少年と少女は一瞬唖然とした表情をした後に疑うような視線をこちらに向けてきた。

少年 「本当か？」

名無し 「本当だ、それよりも早く銃を返してくれ」

流石に時間がやばくなってきたので、少年を急かす。

少年は悩んでいる様だ、時間がやばい、少々手荒な真似をしないと命に関わる。

一瞬でその場で立ち上がり、瞬間で少年に近付いて、その手から銃を奪い取る。

少年 「なっ!？」

少女 「っ!」

少年も少女も突如の出来事に反応できなかったらしい。

奪い取ったりボルバーの中の弾丸を確認する。

装填されているのは先程の火炎弾のLv5であった。
ファイアバレット

咄嗟に銃口を向け発砲する

と少女がこちらに銃口を向けなおし、引き金を引こうとする――

その銃身を掴み、銃口の先を別の方向に向ける。

名無し 「撃てっ！」

強引に銃口の向きを変えたせいで、銃を掴んでいた少女の体も強引に向きを変えられる。

バアンツと大きな銃声・・・こちらに近付いていた黒い影がビクリツと震えた後に

ゆっくりと地面に倒れる。

少女 「なっ・・・」

少年 「何・・・」

名無しの放った弾丸はちゃんと目標に命中し、爆炎を上げ、敵の大多数を吹き飛ばしていた。

そこで少年と少女は初めて自分達がどういう状況にあるのかを悟った様だ。

名無しと少年と少女の三名は自分達を中心に半径10メートル程の防壁シールドウォールと言う魔法によって守られている空間の中に居るという事。

そして、その防壁シールドウォールの向こう側には数多くの子蜘蛛が居た。

防壁に攻撃を仕掛けていた一部の子蜘蛛が爆炎に撒かれていた。

そして、先程少女が撃ったのはシールドを突破して接近していた子蜘蛛であつた。

名無し 「状況が判ったなら協力頼む、後2分しか防壁がもたない

その長銃は貸す、少しでも敵を倒してくれ」

有無を言わさぬ態度で少年と少女に指示を出す。

先程の銃の持ち方から、少年は完全な素人、少女はそこそ可使えるという程度であろつ。

二人とも、短剣を所持しているが、短剣の持ち方から、

短剣の取り扱い方は少年は魔物と戦える程度、少女は人並みというぐらいである。

ここは、少年に少女の護衛を、少女に銃による援護射撃をさせて、

自分が最前線に出て敵を引き付けつつ敵を一部排除後、

この地域から撤退し、スイレン達と合流する・・・と、計算を終了させる。

名無し 「お前は短剣でこいつの援護、お前は護衛されつつその長銃で援護射撃をしろ」

少女 「了解」

少年 「わ・・・判った」

この状況で名無しの言う事を聞く以外に良い案が思いつかないのか、

戸惑いつつも返事を返してくる。

敵の数を数えつつ、溜息一つ。

第十五話 重症、死亡

パンツバアンツとリボルバーの銃声、その銃声のすぐ後に着弾後の火炎弾が

小規模爆発を起こす音と、蜘蛛の足を刻む短剣の音と、

パンツバアンツと定期的に聞こえる 援護射撃の音。

敵は確実に頭数を減らしている。

蜘蛛は本能に従っているのか、少女を真っ先に狙おうとするのだが、

それを少年が短剣を使って切り刻んだりして少女を守っている。

少女は少年が討ち漏らした蜘蛛を片っ端から狙撃している。

名無しはそこから少し離れた場所で複数の蜘蛛を相手にして戦っている。

自分の足元に撃ち込む弾丸は空気砲、エアショット体を吹き飛ばして敵との距離をとる、

とはいえどの方向に距離をとろうにも敵に囲まれている為、必然的に

回避先は空中となる、そこから敵に対して火炎弾を連続発射し、ファイアバレット

小規模爆破、炎上を繰り返している。

重力に引かれて自らの体が地面に落ち始める。

その瞬間にリボルバーに装填された弾丸を変化させ、ファイアバレット火炎弾から

エアショット空気砲にし、着地の準備をす――

名無し 「あれ？」

とそこで不意に違和感を覚える、というより今までの一連の動作に違和感を覚えた。

自分はチームから無断で離れ、少年と少女を助けようとしている、

チームメンバーと一緒に行ったら間に合わなかったかもしれないが、

自分一人で飛び出してきた時は緊張していたはずだ、

それなのに今の自分は的確に戦場の状況を把握して、

少年と少女の戦闘能力を測って的確な指示を出して、

自分自身は敵に臆する事もなく平然と戦っている今の現状に違和感を覚えたのだ。

流石にこれはおかしい・・・と、少しだ――

――少しだけ戦闘に対しての集中が解けた――

パンツ・・・ブスリッ・・・

少女 「うぐうつ・・・」

少年 「スマレ！」

と少女の苦しげな声と少年の焦った声が聞こえた・・・

咄嗟に少年と少女の居る場所を確認すると、少女が蜘蛛によって攻撃されていた。

少女の腹の辺り・・・そこに蜘蛛の鋭く尖った鎌のような前足が突き刺さり貫通していた・・・

突き刺している側の蜘蛛は既に力尽きていたのかゆっくりと音を立って倒れる、

その時に少女に突き刺さっていた前足がズブリッと音を立てぬけた。

少女は左腕で穴の開いた腹の辺りを押さえ、右手で硝煙の立ち上がる長銃を握っていた。

少女 「ごふっ・・・けはあっ・・・」

体をくの字に折り曲げ、口から血と胃液と何かの混じったものを吐き、

そのまま地面に倒れた・・・最後まで銃を握り締めていて、その銃

で近付こうとしている

蜘蛛に狙いをつけようとしていた・・・

少年が必死になって少女の元に近付こうとするが、他の蜘蛛がそれを妨害している。

名無し 「しまっ!？」

咄嗟にエアースhotsの着弾地点を少しずらし、自分の体が真上ではなく、

少年と少女の居る方面に吹き飛ぶように計算して射撃。

予測通り自らの体は少し離れていた少女の付近に吹き飛ばされる。

リボルバーの中の弾丸を変化させ、ファイアバレット火炎弾にして、

周りから少女を狙い近付こうとしていた蜘蛛を片っ端から焼き払う。

それをしつつ、傍らに倒れている少女の状態を確認する・・・

状態は簡単に言つと間に合わない・・・

専門的な道具や治療能力に特化した医者などが居れば余裕なレベルだが

生憎と名無しは治療能力に特化した医者ではないらしい・・・

頭の中に浮かぶのは簡易な応急処置ばかり・・・

それに医者であつたとしても今この場で出来る訳がない。あたりにはまだ相当数の敵が居る。

敵を全て撃破する前に、この少女は力尽きるか間に合わない状態になるだろう・・・

辺りの敵を倒しながらそんな事を考える・・・助けるつもりが・・・助けられなくなってしまった・・・

そんな風にまた考え事をしてしまった瞬間に、

ジャアキンツと、背筋を凍らせるような、鳥肌が立つ様な不快音が響く、

音の方向を咄嗟に向く。

そこには少年がこちらに背を向けて立っていた。

少年の前には血塗れの大鎌を振り切った体勢で力尽きている蜘蛛が居た。

大型犬程の大きさの蜘蛛が倒れる。そして、その少年の頭が――

――ズルリツと音を立ててズレていく――

名無し 「っ!？」

ボトリツと少年の頭が地面に落ちて転がり、その目がこちらを見た。

その瞳は何も映していなかった・・・

そして一瞬遅れて少年の残った体から血が一瞬だけ噴水の様に吹き上がった。

だが、その勢いも一瞬で消え、体が倒れる。

その間に、他の蜘蛛はこちらに対して攻撃してこなかった。

死した少年の体を食ろうとすべての蜘蛛がその骸へと群がっていく・・・

第十六話 本気、合流

骸に群がる蜘蛛を一瞬だけ呆然と眺めたが、すぐにリボルバーを握り締め、

骸に有りつけず、こちらを狙おうとしていた蜘蛛を撃つ・・・

ブシュッと蜘蛛の頭に穴が空き、一瞬だけ内側からボグッと膨張し、

次の瞬間には中身を撒き散らして破裂する。

リボルバーでは連射性能が無い為此のままいくと手数が足りない。

敵を捌き切れない、だからといって抵抗をやめれば一瞬で刻まれてしまうだろう。

グチャッバギツと言う肉と骨を引き裂く音を出来る限り無視して、少女を庇う様に立ち回る。

あれから何時間経っただろうか？

もう2時間近く戦い続けている気がする、実際はほんの数分の出来事だと思う。

辺りは蜘蛛の肉片のこびりつく甲殻と蜘蛛の手足、その他色々な物が散らばっている。

悪臭が酷い、これが切裂蜘蛛ではなく

ボインズンスパイダー
猛毒蜘蛛だったら、切り刻んだ蜘蛛の死骸から放たれる、

猛毒を含んだ体液にも注意しないといけないが、今は関係無い。

飛び散った肉片や蜘蛛の体液で足元がドロドロになって体勢が

いつ体勢を崩してもおかしくない状態である。

蜘蛛は一気に数百から数千の子を産む。

目算で大体200匹は息の根を止めたが、辺りを埋め尽くすような数の蜘蛛は一向に減らない、

しかし、名無しの体力と魔力は見るからに減っていつている。

このままでは体力が尽きて行動不能になるか、魔力が尽きて攻撃不能になるかのどちらかである。

と、ここでスイレンの声が聞こえた、幻聴かとも思った。

スイレン サウザンドナイフ
「千本短剣」

ヒュンッヒュンッヒュンッ・・・ブスッブスッブスッと何かが飛翔する音と突き刺さる音が、

蜘蛛の波の向こう側から聞こえ始める。そこにクルシスの声も聞こえた。

クルシス 「スラッシュウインド
切裂風」

ズバババァーと名無しの丁度背を向けている方向に居た蜘蛛が、魔法によって引き起こされたカマイタチで切り刻まれる。

クルシスは自分に切裂風を纏わせて突撃している。
スラッシュウインド

蜘蛛の波が途切れた事によって向こう側が確認できた。

スイレンは長杖を地面に突き立てて魔方阵に囲まれて何かを呟いている。

周りには数百の在り来たりな短剣が高速で回転しながら漂っている。

時々、そのナイフが近付いてきた蜘蛛に高速で飛び、突き刺さる。

ミラーズ 「ああもう、勝手に単独突入は禁止っ！って、その子怪我してるじゃない」

気が付けばミラーズが名無しの背後に立っていた。

少し名無しに注意した後にミラーズはすぐに倒れている少女の治療にあたる。

クルシス 「あらかた片付けたぞー・・・疲れるなあ・・・」

片手で大剣を持ち、周辺を警戒しながらクルシスが近付いてくる。

スイレ
ン 「はう・・・」

スイレ
ン が周りに短剣を浮遊させたまま近付いてきた。

ミラーズ 「治癒は完了・・・じきに目を覚ますわ」

ミラーズ が少女の治癒を終えて立ち上がる。

クルシス 「さてと・・・面倒事に巻き込まれた訳だが・・・

報告にあつた巨大な魔物つてのはあのスラッシ

ユスパイダーの母体

じゃないか？一応見つけたら報告するってなっ

ちやいるが・・・」

クルシス が遠くの方にあるスラッシユスパイダーの母体の亡骸を見ながら言う。

ミラーズ 「倒しちゃってあるわね・・・報酬出るのかしら？」

ミラーズ もその亡骸を眺めて溜息をついた。

ミラーズ 「とりあえずもう戻りましょう。スイレ
ン は大丈夫？」

スイレ
ン 「ふあい・・・」

とてもふらふらしていて大丈夫そうには見えない・・・と浮遊して
いる短剣が、

いきなり地面に落ちる・・・が、その短剣は地面に着く前に消滅した。

クルシス 「とりあえず名無し、良くやった。」

いきなり頭を撫でられる・・・

名無し 「え？」

注意を受ける事ならした覚えがあるが、褒められる様な覚えは無い・・・

ミラーズ 「まあ、貴方がいち早くここに辿り着いたから少女は助けられた訳だけだね・・・

少年の方は・・・まあ・・・」

最後の方の言葉を濁した後に、少女を見る。

ミラーズ 「とりあえずこの子は保護しましょ、長銃を回収しなさいよ」

と、ここでミラーズに言われるまで少女が握り締めている長銃が自分の物だと

言っつのをすっかり忘れていた・・・

ミラーズ 「さて・・・気を取り直して戻りましょう」

ちなみに、名無しが廃墟から突っ走ったあの森にはゲート転移装置が設置
されていて、

ゲート転移装置を使えばすぐに街と行き来できたのである。

第十七話 帰還、魔物化の情報

転移装置を使い、^{ゲート}転移装置管理施設に飛び、

そこから蝙蝠獣人の少女を医療施設に運んだ後に、

報告書類を纏めてクエストカウンターまで向かった、

その時に名無しの単独行動に関してと、

その時の状況と結果を記載した書類を提出後に、

無許可の単独行動に対する嚴重注意を受けた後に、

やっとの事で開放されたのであった。

現在は嚴重注意の際に指摘された物資の補給である。

クエスト出発前に準備しておくのだが、ミラーズがまとめて用意したので、

名無しやスイレン、クルシスは所持していなかったのだ、

そこの辺りもついでに注意されたのである。

名無し 「疲れた」

バックの中にリボルバーと護身用に手渡された魔力弾を使用しない

通常種の拳銃を入れ、

ついでに発信機と予備の通信機、携帯食料、応急処置キット等を詰め込みながら、溜息をついた。

ミラーズ 「貴方のせいでしょうが」

ミラーズは手元にある携帯食料レーションの使用期限を確認している。

クルシス 「報告は終わったし、保護した女の子の様子でも見に行くか？」

クルシスは既に準備を終えていて、大剣に砥石をかけている。

スイレン 「あの子は大丈夫でしょうか？」

スイレンは一番最初に準備が終っていて、手持ちの杖で地面を突いたりしていた。

ミラーズ 「大丈夫よ、傷に関してはちゃんと治癒はしたから」

クルシス 「こう見えてもこいつは医療技術は高いんだぞ」

ミラーズ 「こう見えてもは余計よ」

スイレン 「様子を見に行くんですか？」

ミラーズ 「準備が終ったらね」

手元においてあった予備弾倉を掴み、中に弾薬が詰まっているのを確認して、

バックの中の取り出しやすい位置に入れる。

それと、渡された弾倉を入れる為の飛び出し防止の止め金具付きのポケットのついた

ジャケットのポケット部分に弾倉を数分入れて、止め金具をしつかりとつけて確認する。

ついでに通信機を入れる部分に通信機を入れて、長銃用の光学標準^{スコープ}器を取り付けて、

暗視ゴーグルと赤外線ゴーグルを確認してバックに入れて―完了。

バックの重量が40kg前後、ジャケットだけで重さが10kg程という重装備の完成である。

ここに、行く場所によっては酸素マスクや簡易テント等の機材も必要になるらしい。

とりあえず用意した物資に関しては自分の自室に置いておく。

用意された部屋は、そんなに広くは無く、クルシスとの相部屋であった。

以外にもクルシスは整理整頓ができていて、部屋はそんなに汚れていなかった。

準備が終ったので医療施設に向かった・・・

医療施設は住居区画から結構な距離がある。

と言っても都市自体がそんなに大きくないので、

離れている＝1駅分あるか無いか程である。

都市内は常に一定温度に保たれていて、酸素濃度も常に一定、

唯一足りない物は天然の太陽光のみである。

それ以外は完璧に整備された人間にとっての楽園のはずであったのだ。

地下都市というのは元々、地上での生活がだんだんとしにくくなってしまったので、

仕方が無く地下に生活に必要な環境を整えた空間を作成し、

そこに移住する計画が立てられたらしいのだが、

その計画は地下都市が各国に建設されて、いざ地下空間での生活を
くと言う段階になって

問題点が発覚した為、中止となったのである。、

都市一つあれば中で数千年は人類は生きる事ができると言われている。

だが一つの都市に居住可能な人数が人口よりも余りにも少なかったため、

その問題点に関してをどうにかするまでは地下都市は使用禁止になっていたのだが、

その矢先に魔物発生の事件が起きたのである。

魔物化は海から始まったと言われている。

海中に居る生物の殆どが肉食になったり、異常な巨大成長や突然変異等が起きた。

次に鳥、昆虫が変異を初め、動物の変異が始まる頃には、

人間にも変異の兆候が見られ始めた。

多量の変異化物質（当時の呼び名）を摂取すると、

異常が起こり始める。

第一段階が精神汚染、ここまで進化した人の事を「狂人」マッドマンと言い、

第一段階では精神不安に駆られ、疑心暗鬼に陥り、

辺りの者を形振り構わず危害を加えると言う異常行動が見られるようになる。

第二段階が肉体汚染、ここまで汚染された人の事を「死体人^{ゾンビ}」と言う。

第二段階では肉体的変化と知能低下が訪れる。

例えば腕部の肥大化、脳内組織の死滅、筋肉組織の異常発達、内臓器官の退化等が上げられる。

第二段階まで進行した時点で、元々の生物は、生物学的に「死」と断定される。

第三段階が完全汚染、完全な魔物化した個体として識別される。

第三段階では完全な肉体的な変化と、知能の完全な消滅が起きる。

肉体的には二足歩行ではなく四足歩行になり、皮膚組織の硬質化、視野感覚の退化

聴覚・嗅覚の異常発達等が上げられる。

第一段階までなら薬品等の投与により治癒が可能であるが

第二段階以上まで進行してしまった場合は、治癒は不可能である。

ちなみに、死体人^{ゾンビ}は、人間を襲い喰らう事がある。

襲われた人間が死亡した場合、死体人^{ゾンビ}の仲間になるが、

生き残った場合は、狂人になる。
マッドヒューマン

その為、ゾンビに襲われても生き残って直にワクチンを投与すれば平気なのだが、

稀に突然変異を起こして一気に魔物に進化する場合がある。

その場合、突然変異型魔物として、自我を保持した状態で魔物化する
場合があるが、

極稀なケースの為、基本的にこの事はあまり知られていない。

第十八話 記録処理

自動的な肉体状態の検査と保管記録の整理を行います・・・

・第一注目事項 現在の肉体情報に関して
体温、血圧に異常は認められず。

肋骨の耐久度の減少を確認、

治癒完了までにかかる予測期間は

平常生活を継続した場合

時間表記にて48時間28分28秒後に完了

日付表記にて3日後の午後6時13分4秒に完了

睡眠や肉体組織の一時的停止による早急な治癒の場合

時間表記にて0時間0分23秒後に完了

日付表記にて同日の午後5時44分36秒に完了

体内に侵入した病原体による損傷、及びに体内組織の異常は発見できず。

侵入した病原体により発生した体内異常は無し。

筋肉組織に体積した疲労度合い

脚力組織：約38%

腹部組織：約27%

腕力組織：約43%

その他組織：約52%

全体組織疲労率：約45%

早急に疲労の除去に当たる必要性有り

以後脳内組織に関して

一部脳内組織の破損を確認

記憶の保有メモリー部分に通ずる回線の破損により

過去のデータの参照に問題が発生している模様

現在記憶中の脳内のデータ処理に関してのデータライブラリを

閲覧する為の回線に異常が発生している為、

データライブラリの参照及び保管に関する情報の提示が不可能とな
っている。

前回記憶からの情報を参照として必要事項の記載は自動筆記にて行
われております。

・第二注意事項 データ保管用メモリの破損について

破損箇所は過去の記憶保管用メモリ全てに通ずる回線の破損

修復：可能 完了までの時間：1800時間と推定 早急な修復
が必要と判断

データライブラリ参照の為の回路の破損について

修復：不可能 不可能な場合のマニュアルを参考に行動を指示

・第一記載事項 人物

第一人物 スイレン（仮名） 性別：女 身長：158・2cm

体重：48・3kg 戦闘力：A

記載事項：空間に対する固体情報および時間概念のズレを確認 今
後も注意する必要有り

第二人物 クルシス（仮名） 性別：男 身長：174・3cm

体重：62・8kg 戦闘力：S

記載事項：近距離戦闘時に協力的な火力を誇る、敵対した場合は超接近戦に持ち込む事により対処可

第三人物 ミラーズ（仮名） 性別：女 身長：163.2cm
体重：53.2kg 戦闘力：S

記載事項：治療術に長けている、敵対した場合は最優先で排除しなければならぬ

第三人物 老人（名称不明） 性別：男 身長：163.4cm
体重：53.2kg 戦闘力：？

記載事項：主な情報は不明 情報の所持者であるが不鮮明な情報である

第四人物 女の子（名称不明） 性別：女 身長：124.3cm
体重：33.8kg 戦闘力：SS

記載事項：妹を名乗る女の子、普通の人間ではない。 固体情報にズレを確認

第五人物 少年（名称不明） 性別：男 身長：152.8cm
体重：52.3kg 戦闘力：B

記載事項：既に生命活動の停止を確認

第六人物 スミレ（仮名） 性別：女 身長：118.5cm 体重：34.2kg 戦闘力：A

記載事項：蝙蝠獣人の少女 推定年齢10歳前後

その他記載不要候補者 23名

記載身長および体重は視野確認による推定数値 誤差 ± 3.5

・第二記載事項 視野感覚デバイスに起きた異常に関して
フラッシュバック
再燃現象等の異常を確認

原因は記憶保管用メモリに通ずる回線の破損が原因と見られる。

一部データを送信時に回線の破損箇所を通過する際に

データが破損し、映し出される映像や音声がボケていたりずれていたりする場合が確認されている。

・第三記載事項 記憶データのバックアップデータに関して

今日までの記録のバックアップデータの保存の際に

記憶データおよびにデータライブラリ参照の回線の破損によって、思考、感情に関するプログラムデータは前回のバックアップデータとの

差異が大多数検知されたため、バックアップデータ保管マニュアルを

参考に別のフォルダ及びにメモリーに保管。

過去のバックアップデータ呼び出しの際に思考、感情のプログラムデータが

多重する事になるため重大なバグや不具合が発生するものと思われる。

上記記載事項から過去の思考、感情に関するプログラムデータをバックアップデータからサルベージ及びに現在プログラムに上書きする場合は厳重な忠告の表記を致します。

・その他記載事項

38%以上の肉体組織（脳を除く）を損失した場合

現在状態表記を行動不能

緊急治癒状態の発動

以上の情報の以下の情報に書き換えます

25%以上の肉体組織（脳を除く）を損失した場合

現在状態表記を戦闘不能

緊急治癒状態の停止

記録の整理と設定の変更が完了致しました。

第十九話 蝙蝠獣人へフルークフリーデ

医療施設—と言つか医療施設の集まった医療区画に到着はしたのだが、道中の記憶が曖昧なのだ。

クルシスとミラーズの後を、スイレんと並んで歩いていて、

二、三言スイレんと言葉を交わしたはずなのだが、

その内容が全く思い出せないし、なんて返答したかも思い出せないのである。

そして、なぜかスイレンは少し俯き気味で、落ち込んでいる。

準備をしていた住居区画から出発した時は、普通だったので、

落ち込んでいる原因は明らかに道中の自分との会話の筈なのだが、

なぜか会話の内容をまったく思い出せないのである。

そんな事をグダグダと考えながらクルシスとミラーズの後を着いて行く。

カウンターで保護した少女が与えられた病室の場所を教えてもらい、そこに向かう。

医療施設と言っただけあって、中は清潔に保たれていて、

真つ白で薬品の匂いが漂っている——そんな場所の一室の扉の前・

クルシスがネームプレートの部分を確認して扉の前に立ち、扉をノックする。

???

「はい？」

中から少女の返答——名は確かスミレ——である。

クルシス

「入るぞ」

???

「どうぞ」

中から聞こえてくる少女の声は何故か淡々としている。 扉を開けて中に入る。

何処の病室も作りは同じなので、

名無しがこの都市で目覚めて最初に見た病室とまったく同じ内装であった。

少女は部屋におかれたベッドの上で体を起こしてこちらを見ていた。

???

「貴方は誰？」

淡々とした言葉で、クルシスを指差して聞いてくる。

クルシス

「おう・・・？俺はクルシスだ・・・が？」

戸惑い気味にクルシスが返答する。

???

「貴方は？」

今度はミラーズを指差して質問してきた。

ミラーズ

「私はミラーズよ」

慌ても戸惑いもせずにミラーズが返答する。

???

「貴方は？」

今度はスイレンを指差して質問してきた、人を指差すのは癖の様な物なのだろうか？

スイレン

「えとっ・・・スイレンです」

クルシスと同様に戸惑い気味にスイレンが返答をする。

???

「貴方は・・・助けてくれた、恩人、名前は知らない」

最後に名無しを指差して——その時になって気がついた——少女の瞳は機能していない。

名無し

「えと・・・名無しだ、それよりも・・・眼は——

スマレ

「私はスマレ、今は視力が無い」

こちらの言葉を遮って少女が自己紹介をした・・・ スミレの台詞に違和感を感じた・・・

今は視力が無い...と言う事は過去には視力があつたのだろう・・・

視力を失ったのは切裂蜘蛛との
スラッシュスバイダー

戦闘時であろう...確か、顔に対しては攻撃を喰らっていない筈であるが・・・

普通の人間なら一番の情報源の視力を失ったら慌てるなりなんなりするはずである。

それなのに慌てていない・・・それに見えていない筈なのにこちらの人数と立ち位置を把握している・・・

ミラーズ 「視力が無いってどういうこと？」

スミレ 「それよりも、シーライは命を落としましたか？」

スミレは質問に答えずに逆に質問をしてきた。

クルシス 「シーライ？」

名無し 「一緒に居た奴か？」

スミレ 「はい、私と一緒に居た男です、十中八九命を落としてますよね？」

あの戦闘の時に守りきれなかった少年の名が出されて、名無しは少し俯いてしまう。

名無し 「すまん……」

スマレ 「何故謝罪するのですか？貴方は命の恩人なのですよ？」

スマレは不思議そうにこちらを向いて首を傾げている。

名無し 「いや、守りきれなくて」

スマレ 「別に良いのです、あの人はあの時命を落とさなくてもいずれは命を落としたので」

クルシス 「どういうことだ？」

スマレ 「あの人は私と契約を結んでいたのです」
「「コンタクト

ミラーズ 「契約？とりあえず、視力が無いって言うのも含めて説明してくれない？」

スマレ 「良いですよ、少し長くなりますが」

そう言うときスマレは自分の種族と特性に関してと、

あの少年との関係に関してを話し始めた。

第一に少女に関して

フルークフーデ
蝙蝠獣人であり、年齢は普通の人間に換算すると11歳らしい。

フルークフーデ
蝙蝠獣人の特徴は背に生えた皮膜の張った蝙蝠のような翼と、

特殊な器官を使用した音波による位置や空間情報の把握である。

視力が無いというのは少女自身の生まれつきの病気で、フルークフーデ
蝙蝠獣人と
は無関係らしい、

病室に入ってきた人の人数を把握できた理由と、大体の位置を把握
できた理由はそれらしい。

少女は蝙蝠獣人の中では相当な地位を築いている血筋の物らしい事、

少年は少女の付き人である事、そして契約を結んでいた相手らしい。
コタクト

第二十話 吸血鬼ヘヴァンパイア

フルークフーデ
蝙蝠獣人の中でも、スミレは地位の高い位置を陣取っている血筋の娘らしい、

シーライという少年はスミレにつけられた世話人及びに護衛だったらしい、

そして、スミレはいわゆる遺伝的な病気によって視力が無いのである。

しかし、蝙蝠獣人の中でも、地位が高い血筋なのに、欠点もしくは欠陥がある事に

対して、スミレの叔父が大いに嘆き、数多くの方法を試して、欠点を補おうとした結果が

コシタクト
“契約” と言うものが完成した。

コシタクト
“契約” とは、ロード契約者に対して、スレイヴ契約側が生命力を削って

ロード契約者に対して特定の効力を発揮する魔法を常に使い続けている状態の事である。

今回の場合のロード契約者はスミレ、スレイヴ契約側がシーライにあたる。

契約の効力はスミレの視力の回復だという。

スレイヴ契約側である、シーライが命を落としたため、コシタクト契約が強制解除され、

スマレの一時的な視力回復の契約コソタクトが解け、視力を失ったという訳らしい。

この契約は契約側コソタクトの寿命を物凄い勢いで削っていく、

そのため、スマレが言っていた「あの時命を落とさなくても」というのは、

シーライに残された生命力が残り少なく、もうすぐ事尽きるという事だったらしい。

スマレ 「他に説明は必要かしら？」

見えていない筈の眼でこちらの眼を射抜きながら、淡々と語っている少女は

まるで機械人形オートマタ、そんなイメージを受けた。

クルシス 「あん？何でそんな地位の高い血筋のお嬢様なんだろう？何であんな所に居たんだ？」

ミラーズ 「確かに、護衛がその契約者スレイヴの少年一人つてのは可笑しいわよね？」

クルシスとミラーズの言う通りで、それだけの地位を持っている血筋の娘ならば、

あんな危険な場所に居るのは可笑しいはずである。

スマレ 「単純に逃げ出してきただけ」

またしても単調で、まるで原稿用紙に書かれた事をそのまま言っている様な感じの言い方。

スイレ 「逃げ出してきた？」

スマレ 「そう、逃げ出してきた。」

今度はスマレがスイレの方を向く、その際に首だけを動かしてスイレの方を向いた、

そして淡々と口が語りだす、本当に機械人形オートマタにしか見えないのだが、

簡単な治療をミラーズが行っているし、ここに来てからもちよつとした検査を行ったので、

機械人形オートマタではないのは確かなのだが、やはり印象は機械人形オートマタっぽい印象を受ける。

スマレ 「今の血筋を残す為にと、やりたくない事を強制されたので逃げ出してきた」

スマレの淡々とした説明を纏めると スマレは叔父上の強制的な命令に嫌気が差し、

世話人兼護衛をかねていた契約側スレイヴの少年のシーライを引き連れて、

フルークフーデ
蝙蝠獣人達が暮らす小型都市から逃げ出してきたらしい。

都市の外は危険なのは理解していたが、あの都市に居る方が危険だと判断したらしい。

都市名は「ブラッド」と言う名称の、小規模地下都市らしい。

その都市の位置はこの都市から徒歩で半日、車両を使って2時間程の場所らしいのだが、

スミレの言う地域座標には何も無い、

外部との連絡手段の無線システムが機能していないのか、機能させていないのかのどちらかである。

スミレの説明だと、その都市の蝙蝠獣人フルークフーデの大半はあまり友好的ではないらしい。

基本的に好戦的でもないが、排他的であり同種族間での仲間意識が強い、

そのため、外部の人間等を歓迎したりはしない、むしろ追い返されるのが関の山だろうと言っていた。

そして、スミレは今後の行く当てが全くないので当分の間はこの都市に住むという事になった、

視力が無いとは言え、人間には無い超音波を発し、感じ取る器官があるので、

視力が無くても日常生活に支障はないので、今の所“コンタクト契約”
に関し
ては

スレイヴ
契約側の人間を探す気は無いらしい。

スレイヴ
契約側になる為の条件と言うのは特にある訳ではなく、

ロード スレイヴ
契約者が契約側に誓いをさせればいいのである。

誓いと言うのは契約側の体液を契約者が飲んで、
ロード スレイヴ

その後、ロード スレイヴ
契約者の体液を契約側に飲ませれば完了と言う事らしい。

体液と言うのは基本的に血液で行う。

そのため、スミレの血筋の人間はフルークフリーデ
吸血鬼と呼
ばれていたらしい。
ヴァンパイア

だが、基本的に伝承に出てくるヴァンパイア
吸血鬼と違って、犬歯が尖っている
わけでも、

太陽の光、クロス
十字架、水が苦手な訳ではないし、杭で心臓を貫かなければ死なない訳でもない。

生命力自体は通常の人間ヒューマンと変わりはない。

ただ、ニンニクだけはスミレ自身が苦手らしい。

第二十話 吸血鬼ヘヴァンパイア（後書き）

作者様がログインしました。

名無し様がログインしました。

名 「……よし、弁解を聞いてやらん事も無いぞ？」

作 「やほー、始めましてー」

名 「無視か？そんなに脳漿撒き散らしたいのか？期待に答えんぞ」

作 「まずは弁解だ、ちょっとまって名無しくん、そのおっそろしい銃口を

今すぐ下ろして貰えないだろうか？」

名 「さっさと言え」

作 「もうっ、人使いが荒いんだ…ごめんなさい冗談です。

えとー気がついた人は多いと思うけれど、3週間ぐらいぶりに更新です

更新が大幅に遅れた理由は聞かないでお願いします。

単純に忘れてただけですので…」

名 「ほお？忘れてたと？んで？もう一つ、後書きが二十話に来て初とか

どういう事よ？ええ？」

作 「いやぁ…後書き何を書けば良いのかわかんなくてさデヘッ」

名 「他の作者のを参考にして書けよ…何してんだよ」

作 「…他の作者の作品を参考にする為に読み漁ってた？」

名 「それってミイラ取りがミイラになる…じゃねえか？」

作 「違うんじゃない？」

名 「……まあいいか、んで？主人公の紹介は？」

作 「しねえよ？」

名 「は？」

作 「いやだって面倒だし面倒くさいしめんどえし」

名 「ああ…ああー…こんな作者で悪いな、うん、ほんとごめんな」

作 「誰に謝ってんの？」

名 「読者の皆様だよっ！！何考えてんの！あんたの作品だろっ！」

作 「え？こんな物見てくれる人居んの？その人頭大丈夫なんだろうか」

名 「お前え…少なくとも作者のが駄目だ」

作 「褒めても能力アップしないぞ？」

名 「褒めてねえよっ！お前マジで大丈夫なのかつ！」

作 「褒めて無いのか…まあ、ここいらで終わりにしね？」

名 「おい、読者の皆様に言う事あんだろっ！

更新遅れてスイマセンとか後書き二十話に来てスイマセンとか」

作 「え？面倒くさい、んじゃ、俺さナナドラ2020やんないのだし

もっいくねー」

名 「おおいつ！お前っ！ふざけんなよ！」

作者様がログアウトしました。

名 「……ああ、えと、色々遅れて申し訳御座いませんでした

いや、本当に読んでくれる人居ないと思うけど、

あんなんでも頑張って更新する…させるんで、

生暖かい目で射殺して…見ていてあげてください。

とりあえず、今回の後書きはこれ…後書き？最初がログインて…

作者え…ゲームのやりすぎだろ…

とりあえず、読んでくださってる皆様ありがとです」

名無し様がログアウトしました。

第二十一話 忠実〈Faithful〉

スミレに一通りの都市の規律と概要を説明した後に、スミレが「眠い」と一言発した為、

スミレの病室を後にした。

その後は、居住区画にある与えられたクルシスとの二人部屋に戻って来たのだが、

クルシスが真つ先にベッドにダイブしていびきを掻き始めていた。

名無しはとりあえずシャワーを浴びて、

用意されていた簡素なパジャマを着て、机の上に銃を並べていた。

目の前の机の上に並べられたFog-10と老人に渡された長銃を眺めている。

眺めていると、少しだけ違和感を感じた。

Fog-10のトリガーガードが長銃の方と比べると分厚く、何かを固定する為の金具が取り付けられている。

バレルの下の部分にも同じ様な金具が取り付けられている。

Fog-10を手にとって、自分のベッドに置かれている枕に向かって構えてみるが、

その金具にどんなパーツを取り付けるのかは想像できない…

クルシス 「何してんだ？」

名無し 「うおっ!？」

先ほどまで寝息を立てていたはずのクルシスがいつの間にか名無しの背後に接近していた…

クルシス 「ん? そういえばその銃・・・銃剣装着可能じゃないか？」

名無し 「銃剣？」

銃剣とは、銃口下部に取り付けるナイフの事を指す。

基本的に白兵戦の時に使われる刺突用の刃物である。 今回の場合の銃剣は、回転式拳銃の銃剣は、

銃の下部、トリガーガードからバレルにかけてに対して短剣の機能を持たせるための部品の事である。

一般的な銃剣は銃に取り付ける剣だが、クルシスが言う銃剣は銃+剣の様な感じのものである。

元から、剣と言う枠組みに、銃と言う機構を取り込んだものではなく、

銃と言う枠組みに、剣の性能を取り入れた感じの物である。

クルシス 「んー・・・ちょっと待ってる」

そう言うところクルシスは机の引き出しを開けて、その中を入念に調べ始めた。

そこで先程の自分の考えが少しばかり固定概念に囚われていた事を自覚した。

F o g - 1 0 は回^{リボルバー}転式拳銃で、射撃が基本的な攻撃となる。

その為、銃と言う機構の特性を注目して、

金具に固定するのは命中精度を上げたりするパーツをつけるのだと思ひ込んでいた…

F o g - 1 0 を机の上に置いて、クルシスの方を見ると、丁度棚から何かを取り出している所であった。

クルシス 「ああ、あつたぞ」

クルシスを取り出したのは、名無しの持っているF o g - 1 0 と同じ会社が作成した

同形式の回^{リボルバー}転式拳銃である。 F o g - 1 0 に比べて軽量で、扱いやすい型で、

こちらは中折式で通常^{トップブレイク}の弾丸が使用可能なタイプである。

しかし、今クルシスを取り出した回^{リボルバー}転式拳銃はF o g - 1 0 と同等

の重量がある。

理由はそのリボルバーの下部にはバレルからトリガーガードを覆う様に

ナイフが取り付けられていた・・・

クルシス 「こいつはFaithful-02だ、その回転式^{リボル}拳銃と形状は同じだが、

こちらは主に強化プラスチックと軽量合金で出来ているから

後付の銃剣を取り付けるとそのFog-10と同じぐらいの重量になるんだ」

名無し 「えと・・・？」

クルシス 「刃の部分自体は軽量合金を使っているから、

刃が欠ける事は無い、それに切れ味も相当あるぞ？」

名無し 「・・・・・・？」

クルシスの言いたい事が良くわからないので、返答に困り、言葉を詰まらせる。

クルシス 「ほら、このFaithful-02やるよ、こいつは通常弾丸と魔弾、両方とも

使えるから護身用にもなるし、銃剣が着いてるから接近戦にも使えるぞ」

そう言うところクルシスは銃剣付きの Faithful - 02 を銃剣を装着したまま収納可能な

レッグホルスターに突っ込んで 投げて渡したので、とりあえずそれを受け止める。

名無し 「えと・・・ありがとう」

とりあえずお礼を言うところクルシスがこちらを見て、何かをボソボソと呟きだす。

名無し 「どうし・・・」

何を呟いているのかを聞こうと思い、口を開くも、急激な眠気に苛まれ、バランスを崩し――

そこで名無しは完全な眠りに落ちた・・・

手からは Faithful - 02 が入ったレッグホルスターが滑り落ちた・・・

倒れきる直前にクルシスが名無しを抱きとめた・・・

クルシス 「お休み・・・ふふっ・・・」

抱きとめた名無しをクルシスが、空いているベッドに名無しを寝かせる。

名無しに布団をしっかりとかけると、クルシスはもう一つのベッドに視線を移す。

”そこには、アホ面で寝息を立てるクルシスが寝ていた。”

クルシス（？） 「問題点は多数か・・・まあ、大丈夫かな？」

クルシス（？）はその背格好に見合わない無邪気な笑顔を見せて、

床に落ちていたホルスターに突っ込んである Faithful - 02 を拾って、

ホルスターから Faithful - 02 を引き抜いて名無しに銃口を向ける。

??? 「あはは、簡単な睡眠スリーピングの魔法にかっちゃってさばかみたいだねー」

銃口を名無しに向けた人物はいつの間にかクルシスではなく旧魔王城で出会った女の子になっていた。

女の子 「くすくす・・・まあ、お母様には怒られちゃうかなあ・・・じゃあね、お兄ちゃん

また運が良ければ会おうね？」

Faithful - 02 をホルスターに素早く収納し、それを名無しの銃が並べてある

机に投げる… Faithful - 02 が放物線を描き、机の上に落ちる頃には

女の子の姿は掻き消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2189y/>

消失した記録～ロストメモリー～

2011年12月1日18時50分発行